

2009年12月27日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙12章1～8節

説教題：ささげることの恵み

はじめに

今年最後の礼拝となりました。この教会も、この一年間どのような歩みをしてきたのかと思ひ返されます。この朝はともにローマ人への手紙12章を開き、みことばの語り掛けに耳を傾けてまいります。1節には、「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい」とあります。ことばの意味はわかります。しかし、では具体的にどうしたらいいのか、そこがわかりにくい。今朝はそこに焦点を当てて、また一年の恵みを確認したいとも思っています。

1 「ささげる」の意味

(1) 聖い動物をささげる

そもそも「ささげる」ということばですが、パウロはこのことばをどんな意味で使っているのか。旧約聖書を見るとすぐにわかりますが、イスラエルの人たちは、神に礼拝をささげるとき、牛とか羊とか動物をささげるようにと命じられていました。パウロは、そのことと重ね合わせながら「ささげなさい」と言っています。ささげられた動物は、ほふられ、血を流し、皮をはぎ、部分部分に切り分けられて、最後は全焼のいけにえとして焼かれていきました。

どんな動物がささげられたのでしょうか。レビ記1章3節にこうあります。「もしそのささげ物が、牛の全焼のいけにえであれば、傷のない雄牛をささげなければならない。」人々が動物を連れてきますと、祭司がそれを

見て検査をいたします。もし少しでも傷があるようなら、それはいけにえにはふさわしくないと突き返されました。主にささげる動物は完全な状態でなければなりませんでした。

(2) でも、からだは聖くない!

このように律法に照らしますと、神にささげる物は聖くて完全な物でなければなりませんでした。一方パウロは「あなたがたのからだを、ささげなさい」と言っています。当然ささげるべきからだは聖いものなければなりません。さて、私たちのからだは傷のない聖いのでしょうか。

パウロは何と言っていたか。7章25節の後半。「この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪に律法に仕えているのです。」パウロははっきりと自分のからだの中に罪が住みついていると告白しました。それなのにパウロは、「あなたがたのからだを、聖い、生きた供え物としてささげなさい」と言っています。どういう意味なのでしょう。パウロは自分のことを忘れてしまったのか。聖くないからだを頑張って努力して聖くさせなさい。そういうことでしょうか。もちろんそんな意味ではありません。私たちは人間の努力によって聖くなることなどできないのです。

そうしますとパウロの言っていることは矛盾しているように聞こえてしまいます。聖くない私たちのからだをどうやって、「聖いもの」としてささげることができるのか。そのことを知るためには、そもそもこの手紙がなぜ書かれたのかにさかのぼることになり

ます。

2 思い上がっていたローマの信徒たち

(1) 限度を超えて

ローマ人への手紙は、当時のローマの教会に起きた大きな問題について、それを伝え聞いたパウロが心を痛めて書いた手紙であるといわれています。当時ローマは世界中の人たちが集まってくる国際都市でした。教会にもいろいろな国籍の人たちが集ってきます。その中にはユダヤ人も大勢いた。徐々にユダヤ人とそうでない異邦人クリスチャンとの間に溝ができてしまいます。ユダヤ人は律法を大切にすべきだと主張しました。異邦人クリスチャンは、いや、律法はもう私たちには何も関係がないと主張し、お互いが自分は正しいと主張して対立していました。どちらも聖書を土台として譲らない。そのような争いが起きておりました。

これはローマ教会に限らず、どこにでも起きる問題です。もちろんみことばに忠実でありたいと願う熱心さにかけては、どちらも同じです。決して相手をおとしめようと思っていないわけではありません。善意から始まったことです。けれども互いの主張が真っ向から対立する。そんなとき私たちは、どちらが正しいのかと悩むことになります。

こんなとき、パウロは全く別の視点から両者をいさめるわけです。3節にこうあります。

「誰でも、思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののけに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」

私たちはしばしば聖書を持ち出してきて「ここにこう書いてあるのだからこうすべきだ」と強く自分の意見を主張したくなるこ

とがあります。自分は間違っているとは思っていません。ところが、パウロに言わせると、そうではない。どんなにすばらしい主張をしようとも、どんなに正しく非の打ち所のない意見を述べようとも、あなたは「思うべき限度を超えて思い上がっている。」言い換えれば高慢になっているのだと指摘します。

私たちは自分の限度というものを知っているつもりです。ですから限度を超えて思い上がるなどと言われても、私は大丈夫と楽観する。信仰の量りに応じてと言われても、信仰の量りは沢山あるように思い込んでいますから、自分では慎み深く考えていると思い込んでいます。

しかし、実はそうではない。自分の知らないうちに私たちは限度を超えてしまうことがしばしばある。私たちの信仰の量りは自分が思っている以上に小さい。その実例を二つあげてみます。

(2) 失敗1：ほかの人と比べて落ち込む「私にはできない」

皆さんはこんなことを経験したことはないですか。教会の中ですばらしく奉仕される兄弟や姉妹がおられます。その人はあらゆることで自分を犠牲にして、時間をささげ、能力をささげ、神さまのために奉仕している。皆もそのことを高く評価している。そんな兄弟姉妹を見て、そうか神さまに喜んでいただけるためには、自分もあれくらい奉仕しなければならないのだと思い、同じようになろうとする。しかしやがて疲れ果ててしまう。「私は落ちこぼれクリスチャン」と落ち込んでしまう。これが一つめの失敗です。

(3) 失敗2：ほかの人に押しつける「あな

たもすべきだ」

二つめの例は逆のパターンです。私はこれだけ頑張っただけで奉仕しているのに、どうしてあなたはしないのか。そういう苦々しい思いです。もちろん口に出して言うわけではありません。でも、自分が頑張れば頑張るほど、他の人たちがのんきにしているように思えて腹が立ってくる。そんなことはありませんか。

今、よくありがちな二つのケースを取りあげました。表面的には、全く違うことのように思えます。ところがパウロに言わせると、どちらの問題も原因は同じ所にある。どちらの場合も、自分の限度を超えて思い上がっていたから、こんなことになる。パウロはこう言っています。4 節。「一つのからだには多くの器官があつて、すべての器官が同じ働きをしない。」6 節。「私たちは、与えられた恵みに従つて、異なつた賜物を持つている。」

私たちはそれぞれ違う賜物を持つている。それは何度も聞かされていますから、頭ではわかっているつもりです。ところが、実際の奉仕のこととなると、そんなことは忘れてしまいます。みんな同じ事をするのが「平等」ということだと思ひ込んでいます。だから、あの人が見ていることを私もしなければと思ひ込んでしまう。私がしていることはあなたもすべきだと思ひ込んでしまいます。

でも教会は違います。みんな違う。みんな働きが異なる。違うけれどもキリストにあつて一つのからだを形づくっている。それが教会なのだと思ひられます。もしそうでないのなら、聖書によれば、それは思ふべき限度を超えて思い上がっているということになります。まさにローマの教会の人たちはそのような状態にありました。それ罪ということにつながります。そうしますと、ますます聖い

供え物とはならないことになします。いったいどうしたら聖い、生きた供え物としてささげることができるのでしょうか。

3 聖くないからだをからだをささげている

(1) キリストによる解決

神は私たちの弱さをよくご存じですから、二つの解決を与えてくださいました。一つめがキリストによる解決です。

先ほども触れたことですが、私たちが弱くなっている原因はこのからだにあります。からだの中に罪が宿つていて、それが私たちを苦しめている。神はそれがどれだけ大変なことなのかよくご存じです。8 章 3 節の後半。「神は自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」

先週クリスマス礼拝のときを持ち、主の御降誕をお祝いしました。どうして神がわざわざ人となられて私たちのところに来てくださったのでしょうか。どうしてわざわざその方が十字架で死ぬ必要があつたのか。全部ここに説明されています。私たちのこのからだに宿っている罪を処罰するためには、これ以外の方法がなかつた。この肉のからだの罪が処罰されるために、イエス・キリストが十字架で罰を引き受けてくださいました。

聖くない私たちが、どうしてこのからだを聖いものとしてささげることができるのか。ここに解決があります。主が私たちのために御自身の御からだをささげてくださったから。だから、私たちは安心してささげることができます。

(2) 御霊による励まし

二つめの解決は、御霊による励ましです。私たちは信じて救われた後、天の御国に入るまでのしばらくの間、この弱いからだを身にまわって置かなければならない。言わば矛盾した状態に置かれているのですから、当然そこで苦しむこととなります。そのことも神はご存じであって、私たちが気落ちすることがないようにと、御霊を送ってくださいました。パウロは不思議な表現をしています。8章9節。「もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。」私たちは肉という衣をまわっているのですが、神の目からご覧になると、御霊という衣をまわっている、御霊の中に私たちが入っている。そんなふうに見えている。そういうことだと思のです。

確かに肉の弱さが襲ってきて、聖さとは正反対のこのからだであるけれど、御霊が私たちを包んでいるので、私たちは聖くさせられていく。御霊はそのように働いて下さっています。

私たちは自分の本当の姿を見たとき、こう祈らざるを得なくなります。「私たちのからだは確かに聖くありません。罪に汚れています。思う限度を超えて思い上がるような私です。主よ、そんな私をあわれんでください。」

神はこの祈りを聞かれて、どうされるのですか。あわれみの神は、私たちの弱さを包み込む方ではないですか。聖くない者を、十字架の血潮で聖くしてくださる方ではないですか。御霊は、このような弱い私たちを父なる神に対して証しして下さるのではないのですか。

パウロは言います。「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え

物としてささげなさい。」

このみことばの前に忠実であろうとするなら、自分のからだをささげようとするとき、私たちは自分の中に宿る罪を意識せざるを得なくなります。罪に汚れている自分であることを認めざるを得なくなります。そのことをまず神に申し上げるしかありません。

高い所から偉そうに語っている私自身がそうなのです。私は、土曜日になって一週間をふり返ったとき、こんな自分が明日の礼拝の奉仕に立てるのかと迫られるのです。言い訳できない罪人であることを主に申し上げるしかない。主のあわれみによって、主の十字架によって、御霊のとりなしによって、初めて私はここに立つことが許されている、そう思っております。

「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。」私たちは何気なく普段、奉仕しなさげていたのですが、実は汚れたものを受け入れてくださっていたのだ、そのような恵みに気がつくこととなります。

4 ささげることの恵み

ここまでは、どちらかと言うと個人的な信仰の歩みについて話しました。しかし、このことは個人レベルで終わるのではないことを最後に触れておきたいと思います。

パウロも言うように、私たちはキリストのからだにつながっていて、そこでひとりひとり異なる働きをしています。あの人と同じように働かなければと思う必要はありません。あの人も私と同じように働くべきだと思う必要もない。それぞれが、神さまから信仰が分け与えられております。その違いは最初なかなかわかりません。でもお互いが慎み深く

なっていったらどうなるでしょう。お互いに賜物が違うことが見えてきます。それぞれの賜物がそれぞれに活かされていけば良い。そんなふうに思えてきます。こんなことを言いますとある方は心配します。「みんな違っていたら、ばらばらになってしまいませんか。」

心配ありません。キリストのからだは本当にすばらしい。違う個性が集められているところに、美しいハーモニーが奏でられていく。それが教会だと思うのです。

この教会はどんな教会でしょうか。ある方がこんなふうに言ったそうです。「この教会は、それぞれがばらばらに好きなことをやっているように見える。」けれども、不思議にそれらが一つにつながって調和がとれている。「おおぜいいる私たちも、キリストにあつて一つのからだであり、ひとりひとりが互いに器官なのです。」このみことばとおりに私たちは導かれてきた。そんな一年であったことに気がつきます。それというのも、それぞれが主に示され、それぞれがご自分のからだをささげる歩みであったという確かな証拠ではないでしょうか。確かに神はこの教会にも豊かな恵みを注いでくださいました。主の御名を崇めます。